

# 健康手帳

## 定番にみる日本人の伝統的ふるまい

◆ 心身健康センター所長 廣瀬政雄



わが国の多くの医学研究のうち、細菌学者で黄熱病や梅毒の研究を行なった野口英世博士（1876-1928年）と破傷風とジフテリアの研究を行なった北里柴三郎博士（1853-1931年）の業績がよく知られていて、ともにノーベル賞候補者になりました。これらは主に留学先での研究が認められたものでした。一方、国内で独自に成し遂げられたものとしては、華岡青洲の業績があります。花岡青洲は曼陀羅華の花などから麻酔薬を完成させ、1804年に世界最初の全身麻酔下の手術を成功させました。この業績は世界的に非常に高く評価されています。

それほどよく知られていませんが、荻野久作先生（1882-1975年）は産婦人科医師として、妊娠と出産にかかわる事故で多くの女性の悲劇を体験するうち、当時分かっていなかった女性の月経周期と妊娠の関係を研究し、排卵が月経初日から14±2日に起きることを発見しました。しかし、当初、わが国では反対意見も多く、世界産婦人科学会で発表するなどして、世界的に認められるまで受け入れられなかったといわれています。現在、この発見に基づいた避妊法は「オギノ式」として広く知られています。

光触媒の原理を発見した東京理科大学学長の藤島昭さんは、その経緯について、大学院生の頃（1967年）、偶然入手できた酸化チタンの単結晶と白金を電極としてキセノンランプの強い光を当てる実験を試みたところ、酸化チタンからは酸素が、白金からは水素が出ることを観察したそうです。これが光により水の分解が起きるという発見になり、抗菌作用を持つ製品の開発に利用されています。しかし、当初は国内で全く評価されず、学会でも「もっと勉強してから研究なさい」などと論されたということです。その後、この成果がNature誌に掲載されると、国内の反響が信じられないほどに変わったということでした。

東北大学の西澤潤一さんは、光通信に関して

独創的な業績をあげましたが、国内では理解者に恵まれなかったそうです。そのためアメリカのコーニング社に応用特許の面で先んじられて、実用化に当たって巨額の特許料を支払う羽目になったということです。

最近、日本人になった日本文学（文化）研究者のドナルド・キーン（雅号は鬼怒鳴門）さんによりますと、日本人は既に認められたもの（定番）に対して強い執着を示す性質があると述べています。中世以来、日本の旅人は常によく知られた場所に旅行し、桜か紅葉をほめそやしてきましたが、知られていないものに対しては、それがどんなに美しいものでも一言一句も費やすことがなかったようです。平安時代に成立した歌物語の伊勢物語にでてくる杜若で名高い八橋には、既に杜若がなくなって久しいにもかかわらず、繰り返し旅人が訪れたということです。桂離宮や二条城の建築と造園に才能を発揮した小堀遠州に至っては、500年後にも八橋で杜若のあとを尋ねて、杜若が既がないことを再確認したそうです。川端康成は「東海道」という作品の中で、「先人の足跡に従って、名所旧跡にお百度を踏むだけで、無名の山川をみだりに歩かぬのが、日本の芸の修行の道であり、精神の道しるべだった」と述べています。まさに、日本人は先人の体験を再体験することを常に望んでいたのです。

国内での成果を認めることにおいて慎重な姿勢のようにみえますが、一旦海外で認められると手のひらを返したように参集する日本人の態度は、中世以来の伝統的なふるまいやものの見方が影響しているかもしれません。定番に対する日本人の姿勢は、学ぶときには長所かもしれませんが、発明や発見を客観的に評価する場合には短所となりえます。発見や発明はもとより重要ですが、国際化の時代には、独創的な発想や成果を正しく評価できる人を多く育てることも大切なようです。